【大黄】

大黄（だいおう）は、タデ科の植物の根茎で、神農本草経（しんのうほんぞうきょう）や本草綱目（ほんぞうこうもく）など多くの文献に緩下、解毒、健胃などの薬効が記載されています。

成分については、十九世紀より研究が進み、効果の本質はアントラキノン誘導体（センノサイド）と考えられています。これも古くから植物性下剤として広く知られているセンナ葉やキダチアロエなどにも、このアントラキノン誘導体が含まれています。

内服しますと、いったん小腸で吸収されたものが胆汁とともに再分泌され、大腸に達し壁を刺激して作用すると考えられています。また、直接大腸に達し、腸内細菌叢によって活動性を得て、大腸の粘膜や筋層の神経叢を刺激するという説もあります。

大黄は、一般的には実証の人に与えますが、薬効は個人差が著しいため使い方が難しいお薬です。大黄と附子を上手に使えるかどうか、漢方医の腕の見せどころです。

他の生薬との関連ですが、黄連（おうれん）、黄柏（おうばく）などと共に用いて胆汁分泌促進作用が期待できます。さらに利尿作用や膵機能亢進作用、コレステロール低下作用も認められています。